

# 人と人を繋ぐ地域猫活動

## — 地域福祉の基盤を耕す —

渡邊 晓                  渡邊 洋子\*

Community cat activity that connects people  
-We develop the foundation of community welfare-

Satoshi Watanabe      Yoko Watanabe

### Abstract

Although homeless cats have been eliminated as annoying animal, the community cat activity regards the homeless cats as a community resource for regional revitalization.

The community including annoying cats is much more comfortable to live as a relaxing and gentle community rather than the community excluding them. The one aspect of this activity is that cat problems replace problems of community residents. Regarding the problem of homeless cats, cats themselves are not the matter, because it is the matter of people connected with cats. In this sense, the community cat activity is connected with the development of the foundation of community welfare.

In this paper, writers organize and verify the activity for park homeless cats, in that writers participated, that is approved of TNR (Trap Neuter Return) and the overview of the community cat activity which is received community designation of Fukuoka City .

**Key words :** Community cat activity, Community welfare, Mutual aid

### 1. はじめに

地域猫活動<sup>1)</sup>は、環境省（平成24年）が「野良猫の頭数削減に効果あり」と認め、「官民挙げて一層の推進を」との方向性が示された活動である。それに先立ち、福岡市は平成21年10月から地域猫活動を動物愛護管理センターの目玉事業に位置づけ、スタートをきった。この6年間で、65地域、市内の野良猫1599頭が繁殖制限の手術を受けてい

---

\*福岡大学非常勤講師

る。福岡市は現在、一部を除き野良猫の回収業務を廃止している。また、改正動物愛護管理法(H25年)により、相当な理由がない限り引き取りを拒否できるようになっている。従って地域の野良猫の頭数を公的に抑制するためには、地域猫活動しか手だてがないのである。従来の殺処分ではなく、野良猫の数を減らしていくことで、猫による被害を防いでいるという政策に切り替わったわけである。行動を起こさなければ、猫は増え続ける。

ところで「飼い主のいない猫との共生支援事業」として、行政支援が始まった地域猫活動であるが、この活動が地域再生の入口となっているところは、住民が野良猫問題を「地域の環境問題」として、自分の地域を住みやすくしようという考え方で協力している地域である。地域全体の環境が好ましくない状態では、それぞれが影響を受けるからである。個人では解決できない問題の一つと言える。

同じく防犯・防災・子どもや高齢者などの見守りが、個人の力だけでは限界がある地域課題とされている。野良猫の問題はその中でも一番身近な問題と言われる。猫をきっかけに、

- ① 地域の問題点を自主的に解決していく仕組みが形成される。
- ② 町内の人たちの関係が再構築される。(ゆるやかな繋がり)
- ③ 行政や役員頼みだけではなく、自分ができる小さなことを出来る時にやろうという前向きな意識が形成される。
- ④ 苦情（主観視）から相談（客観視）へと捉え方が変化する。

全国的に迷惑な存在として排除（殺処分）され続けてきた野良猫達であるが、近年地域づくりのための「地域資源」<sup>2)</sup>として見直されているのが「地域猫活動」である。迷惑な存在を排除（そのうち人も心理的殺処分されかねない）するより包み込む方が、心のゆとり、優しさがある成熟した地域として誰もが住みやすい場所のはずである。猫が人に徐々に置き換わるのがこの活動の一面といえよう。その意味で、地域猫活動は地域福祉基盤を耕すことに繋がってくる。

本稿は、筆者らが実践した二つの活動—TNR<sup>3)</sup>が認可された公園猫（以下「防犯猫」）活動、および福岡市の指定を受けた地域猫活動—の概要をまとめ、活動の検証を試みたものである。

## 2. 地域猫活動試金石としてのA公園における「防犯猫」活動

### 2. 1 活動の目的

平成26年3月、「防犯猫」活動（仮説）という位置づけで、A公園において活動を開始した。

平成24年（環境省）飼い主のいない猫対策として、いわゆる「地域猫」が「苦情件数低減、頭数減少に効果有り」とし、「官民挙げて一層の推進を図ること」の一文が記載されたのが「動物の愛護及び管理に関する法律改正の附帯決議」である。これに先立ち、福岡市保健福祉局は平成21年、「動物愛護管理推進実施計画」でその支援事業を開始している。

TNR（捕獲、手術、戻す）もその流れを汲む理念であり、愛護と管理の均衡を保つ活動であるが、筆者らの活動フィールドは公園内であり管理に軸足を置いていくことになる。その意味で「地域猫」とは言えない。「苦情件数低減、頭数減少」と目指す方向は同じでも、遺棄猫・虐待防止を基に公園犯罪全体の減少を目的とする取り組みである。

さて、A公園「防犯猫」活動の目指すものは、次の二つである。

- ① 野良猫の頭数減少と苦情件数低減
- ② 遺棄猫・虐待防止を基に公園犯罪全体の低減

活動の具体化として、①はTNR ②は防犯パトロールを行っている。頭数減少・苦情件数低減のためにはTNRだけでなく、遺棄猫防止を視野に入れざるを得ない切実な事情がA公園にはみられる。

猫の遺棄は比較的軽い犯罪と思われ、あるいは犯罪意識の少ない人達もいることでは、かつての飲酒運転と似通った心情が引き起こす行為なのかもしれない。その「軽微な犯罪」を定期的な監視の目で一定程度防ぐことができるなら、公園犯罪一般の抑止力になるのではないかという見通し（仮説）に基づいたのが「防犯猫」活動である。

一日数百名の不特定者が利用し、自然も有する広域なA公園において、飼い主のいない猫対策を講じようすれば、愛護と管理のバランスが崩れるとはいえ、切実でより現実的な対応が肝要である。周囲に受け入れられるのか、また人間側の都合で一方的に生殖機能を奪われる野良猫達にとっては、これでいいのかと常に迷い立ち止まりながらの活動であったが、地域猫活動の成否を考える上での試金石となった。

## 2. 2 A公園における猫活動の概要

### (1) 開始時の頭数

約40頭 <内12頭がすでに個人で手術済み>

<内訳>

- ・神社近辺 約10頭 (内4頭—♀3／♂1 TNR済み、子猫2頭里親)
- ・どんぐり山（通称）周辺 20頭弱
- ・芝生広場 約5頭 (内4頭—♀2／♂2 TNR済み)
- ・南部広場 約6頭 (内4頭—♀3／♂1 TNR済み、子猫2頭里親)

### (2) 確認できている遺棄猫について

子猫4頭（里親）／成猫10頭（2頭里親）→現在8頭

\* 25年5月中旬 遺棄成猫2頭現場目撃、警察官立ち会いの下、飼い主持ち帰り

### (3) 活動時間と場所

定期的活動者3名、各10頭分担で1日1回、開園前と閉園後の時間を利用し、①餌の残りは持ち帰ること ②糞処理などの周辺清掃を心がけること

を申し合わせて努力中。加えて犬散歩メンバー5名に、餌の放置を目にしたら回収してもらうよう協力要請し、承諾をえている。また早朝に公園南部一帯のごみ・犬猫糞収集を、閉園後に公園入口から北部にかけてのごみ・糞収集を兼ねた防犯パトロールを、毎日行っている。

## 2. 3 活動1年後の成果と課題

### (1) 成果

平成27年3月現在、昨春TNRが間に合わずに産まれた仔猫11頭及び周辺地域出入りを含む51頭がTNR済である。26年発生遺棄猫4頭は1頭残らず姿を消し、周辺地域からの流入も止まった。個体識別用の写真を用意でき個体管理ができる状態に落ち着いた。手術と給餌でグループが固定したため、よそ者は排除されるのだろうか。秋生まれの仔猫はゼロ、現在TNR100%である。管理の結果、定住は約30頭、開始時が約40頭だったので、既に減っているわけである。TNR70%<sup>4)</sup>が低減効果数値（2～3年後に半数となる）とされているが、遺棄猫が発生しやすい公園においてはより高い数値目標が必要と考え、100%を目指した。そのためか2年を待たず減少率も高いようだ。本稿を起こしている秋時点では、病死あるいは里親に引き取られた（2頭）こともあり、実際20数頭に減っている。縛張りを巡る「鳴き合い」はあるものの、今のところ発情の声もなくグループ毎に落ち着いて暮らしている。手術の結果移動範囲が狭まつたこと、頭数が減ったことに伴い、第一目標である猫被害に関する苦情件数（上半期はゼロ）も減っている。

次に第二目標である公園犯罪全体の低減であるが、今回はがけ崩れ復旧工事による数か月間の公園裏口閉鎖が、図らずも活動の支援効果となった。夜間の人目につきにくい裏口が閉鎖されたため犯罪抑止効果がでたように思われる。

公園管理事務所の理解の下、遺棄防止用チラシ掲示をしており、夜間警備員の巡回時の協力も得られるなど、公園スタッフの防犯意識も高い。夏休み期間は、交番、校区自治協議会メンバーによるパトロール、学生ボランティアなど、外部からの支援も加わった。猫活動や動物遺棄に対する犬の散歩メンバーへの理解も取り付けやすくなっている。その結果、利用者の一部ではあるものの、防犯全般にわたり意識の向上がみられる。

公園管理事務所によると、昨年に比べ火遊び、器物破損などの犯罪件数はかなり減っているとのことである。

### (2) 課題

一方で、以下のような課題を有している。

#### ① 安易な餌やりや置き餌の防止や、クレーム対応が難しい。

管理事務所スタッフと共にA公園の環境を守り、利用者同士で公園を快適な場所にしていこうという行為の一つを猫活動は担っている。しかし、利用者が不特定多数のため、活動の理解に時間がかかる。安易な餌やりや置き餌は続いている、適正管理下の餌やりも含

め、それに対する苦情は出るものと思われる。糞被害は減ってもなくなることはない。

② 広域なため、遺棄行為や虐待行為等の犯罪防止が難しい状況にある。

21時から7時にかけてのほぼ無人の時間帯で、あるいは有人の時間帯でも公園東側や三つの山では監視の目が届きにくい。

③ 定期活動ボランティアが少数なため、一人で複数の活動を担っており負担が重い。

④ 公園利用者の目に余る身勝手さ

詳細は省くが、利用者の公共意識・モラルの低さは事例を挙げるときりがない。他者の労働に対する敬意のなさ、ゴミや犬の糞の放置など、身勝手な利用者が増えている。そもそも公園を利用させてもらっているという意識、公園の環境を守るために自分ができる小さなことは実行するという公共心も窺えない。猫を捨てるという無責任な行為がなくなることはない。特に雨の降る日は人通りが絶えるせいか要注意である。

### (3) 防犯猫活動が一定の成果を上げた要因

遺棄猫を含む防犯という共通目標を設定し、活動者・一部の公園常時利用者・公園管理スタッフ・夜間警備員・交番が協働で継続した活動になったことが考えられる。換言すると、協働の仕組みを作った上で、公園内の犬猫の糞と置き餌及びゴミ回収など「誰にでも出来ることを、誰にもマネできないほど毎日続けた」からであろう。また、月2回の「防犯猫通信」による活動報告の取り組みも、周知理解に役立った。

一つの問題事象（野良猫問題）は、大きな問題（人の問題）とリンクする形で現象化する。それを個別の問題として切り離すと、近視眼的対策となり、効果が出ないばかりか協働も分断されかねない。従来、野良猫対応はエサやり禁止・犯罪は警察・環境整備は公園管理スタッフと分かれていた。遺棄猫を含む野良猫は増え、エサやり苦情は増え、協力すべき人たちとの対立がうまれていた。今回、公園問題全体の中で野良猫問題を捉え直したのが、防犯猫活動である。今後は1年毎の減少データを探っていきたい。遺棄猫さえ出なければ正確な数値に近づけるのであるが。

## 3. 地域猫活動

「動物が不幸な地域は人も不幸である」これは、動物愛護管理センターが地域猫活動の説明や啓発に用いる教材中の言葉である。「動物」の箇所はそのまま「障害者・高齢者・子ども」に置き換えられる。野良猫の問題を考えるということは、自分がどういう地域に住みたいかということに深く関わっている。地域猫の考え方は、猫トラブル解決の方法の一つにすぎないが、今最も必要とされる地縁づくりを図る意味でも、有効と考えられている。一方、考え方の違いを調整し、異質な他者との共存を図ることから、地域猫活動がうまくいくかどうかは地域の成熟度を映す鏡にもなっている。後述するが、様々な問題点（時代の病）に直面することがある。一筋縄ではいかないのが地域猫活動である。

本活動は、まず地域問題の掘り起こしから始まる。

### **3. 1 活動の概要**

#### **(1) 問題の掘り起こし**

地域が元気になるための方法は、実は地域の中に存在する。本活動では、「ネコ」をキーワードに、立場を越えた新たな人間関係が築かれることを目指している。それには、まず様々な事情や考え方の違いを理解しようとすること、次に事情や考え方の違いを前提に情報収集し問題点を明らかにすること、そして出来ることを積み上げていく。相手の認識を変えるということではなく、今ある問題を具体的にどうしたら解決に向かうかを考えるのである。活動者は、あくまでこれらを中立の立場で判断することが必要であり、コミュニティ・ソーシャルワークやコーディネーターといった役割を担うことが望ましい。

当地域の場合、餌やり住民との対立及び野良猫・外飼い猫の増加とそれによる糞尿被害が共通問題であった。

#### **(2) 行政窓口（動物愛護管理センター）へ相談**

まず町内会長に現状を伝え、次に地域役員と住民十数名に活動賛否の意見を求めるところからこの活動は始まる。やってみようということになり、行政相談窓口へ。行政による地域猫活動説明会を開くこととなった。ここで活動理念も含めて内容を住民に説明し、納得してもらうために重要な役割を担うのが行政である。横浜市職員であり、地域猫発案者である黒澤泰は「行政が前面に出なくとも後ろでしっかり見守っている関係が大切」と言う。地域住民・活動ボランティア・行政の三者協働が機能するかどうかが、この活動の成否に影響するからである。

地域説明会では、被害に遭っている住民から「糞との共存などできるものか」という反対意見も出たが、繁殖を抑えることが問題解決には不可欠だということを参加者は感じていた。とりあえず始めてみようということになり、頭数調査などの準備を進め、市の指定地域認可を受けた。

#### **(3) ルールを明確にし、実行する**

地域住民にとって一番の問題は、野良猫の糞尿と餌の管理である。猫トイレを数か所設置し、きちんと管理出来ていることを分かってもらわなければならない。餌の放置は不衛生かつ他の場所の猫を呼び寄せるので禁止である。こういった活動を実行し、以下のような活動成果を知らせることが理解を得る近道と言えよう。それには回覧板を利用した広報が有効な手段となる。

### **3. 2 活動中の成果と未解決問題**

#### **(1) 地域で子作りをさせない**

隣接地域からの流入を含め58頭が手術を受け、今秋生まれの仔猫はゼロ。隣接自治会

では今春数頭が生まれているので、現在、その仔猫に着手している。

#### (2) 迷惑をかけない／自衛策をとる

給餌をしていた住民は、手傷もいとわない捕獲の中心メンバーであった。彼らの働きにより集中して捕獲成果を上げることができた。その後はトイレのしつけを努力中。

一方、糞尿に悩まされてきた住民は「猫を寄せ付けない」方法で自衛に乗り出している。こちらも「いたちごっこ」の一筋縄ではいかない、根気のいる取り組みになっている。

#### (3) ボランティアによる共存の仕組み作り

両者を支援するため、猫公衆トイレ6か所を設置、トイレへの誘導を図っている。その上で、犬猫の糞と町内ゴミの回収を毎日継続している。

#### (4) それぞれが出来ることで結びつくという新たな人間関係

防犯クラブ数名のバックアップを始め、情報提供、捕獲器設置交渉、物品提供、寸志提供と、立場の違いを越えて有志がどこかで部分的に参加してくれる。

まとめると、以下が現在進行中の三者協力内容である。

○ボランティア：猫の捕獲と搬送・広報、公衆トイレ誘導、ゴミ拾いと糞回収（毎日）

○住民：猫被害対策の自衛や情報提供、飼い犬・猫の適正飼育、手術済み猫への餌やり支援、見守りなど

○行政：無償での手術（原則1年間）、猫除け機器の貸し出し、相談や助言

これに加え

○野良猫：子作りしないよう繁殖能力を差し出す（リスクも背負う）

#### (5) 未解決問題

未だに糞尿被害の声が上がるエリアがある。何といってもここは猫密度が高すぎる。猫を散らし分散させることが解消につながるのだが、それには給餌を伴う。野良猫問題では糞尿被害の矛先が「給餌者」にむけられることが往々にしてある。いわば「加害者」としての実体が最も見えやすいからであろう。これでは「被害者」対「加害者」という構図ができる、地域内に対立をうむだけとなる。行政が野良猫対策として給餌規制のチラシを配布してきたこともあるが、地域猫といつても給餌に対する住民の抵抗感は相当である。その分猫を分散させるための給餌協力者がいない。

野良猫問題は地域内の人間関係悪化が根源にある。猫そのものが問題なのではなく、猫をめぐる人と人との関係性に問題があると言える。当地域でも以前からのしこりのある関係は、この活動を始めたからといって解消されるというものではない。しかし、活動を始めなければ今までと同じ対立の繰り返し、あるいはより不寛容な空気が増幅する地域にな

るだけである。加えて、人間側の都合で一方的に生殖機能を奪うことへの根強い抵抗感を示す住民も少なくない。

この問題の背景に、快適で便利な環境を求める現代の生き方は、自己中心性と結びつきやすいことがある。野良猫問題に関しては、自然をコントロール下に置いた現代社会の誰もが、加害者でもあり被害者でもあるという複雑な感情を無意識に抱いている。この活動はその複雑な感情を呼び起こす一面があり、どちらにもぶれさせないよう、冷静で平衡の取れた対策が求められるだけに極めて難しい。

#### 4. 地域猫活動が広がらない理由

猫問題対策に関しては、原因を特定し規制すれば解消するかといえば、もっと大きな枠組みで捉えないことにはかえって望ましくない方向に向かうという要素が内包されている。問題の捉え直しという点では、地域活動全般に通じるアプローチと考えられる。

人は自然の一部とみなす日本の自然観（動植物との共生）、「もったいない、いただきます、かわいい→かわいそう」など独自の日本語に表出される宗教観、文化（異質を取り込み調和共存）と、よくも悪くも対立させるような仕組みはうまく受け入れられないのが日本人の感性であろう。これらを加藤周一は「雑種文化」、遠藤周作は「分けない文化」、河合隼雄は「母性原理」と名付けており、意識面を視野に入れた「より大きな枠組み」で対策を考えることが必要であろう。その点「地域猫」なら日本人の自然観や動物観、宗教観といったメンタリティーにもなじみ、地域に生み捨てられた猫による被害低減効果も期待できると思われる。行政による啓発も進められており、どちらも大きな枠組みによる解決を図ろうとしている。しかし、全市的には「地域猫」の認知度は低く、なかなか理解を得られない。

##### 4. 1 地域猫活動を阻むもの

###### (1) 無縁社会という壁

野良猫問題は地域全体の問題と意識化された時、解決に向かう。住民が困っているのは糞や庭への進入であり、戻ってきた猫が元の生活をすれば苦情が減るというものではない。不妊去勢手術は長い目で見ると有効であるが、地域の理解を得るために手立て（仕組み作り）が優先する。

活動内容は同じなのだが、順序が逆になると苦情にもなりかねず、「餌をやる人がいなければ猫はいなくなる」という短絡的思考に結びつく。マスコミで活動的一面だけを切り取って取り上げられがちな地域猫活動反対の声は、このような背景から生じてくることが比較的多いように思われる。

活動はまず人間関係づくりからスタートするのであるが、人にも猫にも無関心、面倒なことには関わりたくないという傍観者派住民は少なくない。その結果、地域猫活動は猫がかわいそうだと思う人達の活動との誤解を受け、猫に関心がある人がやればいいとなる傾

向がある。定期的な活動者確保が困難というのが、多くの地域の共通課題となっている。

#### （2）不寛容という「現代社会の病」からくる壁

野良猫問題は、猫そのものが問題というより、猫をめぐる人ととの問題という側面が多分にある。現代社会の「病」や「闇」を反映しやすいと言える。現在の快適で自由な環境を求める生き方は、住民との接触を煩わしいものとして避けがちである。住民との接触がなくても生活できるから、どうしても自分中心に物を考えがちで、近隣住民への許容性や配慮もなくなっている。孤立・対立・迷惑な存在は排除（猫も人も）するという流れが容易に生まれる下地がいたる所にある、というのが地域の姿であろう。ここに野良猫のルールのない給餌行為があれば、トラブルはすぐに発生する。全国では殺人事件にまで発展したケースがあるほど深刻である。

深刻化する前に、孤立・対立を緩和する（考えの違う他者や異質な存在と共生するためには必要な考え方や心を育む）ことを、野良猫に体をはってもらい地域資源にしてやっていこうというのが、地域猫活動の理念だと筆者は考えている。だが、住民同士の話し合いの中で、猫との共存など許せないというふうに話がまとまれば、その程度の意識しかない地域だと思うしかない。同意が得られなければ、活動を始めても猫トラブルは減るどころか悪化する側面もある。活動を始めようにも始められないという地域も決して少なくない。

#### （3）効果がすぐに表れないこと。

野良猫の寿命は4～5年（人間の30代半ば）と短命である。繁殖制限を受けた猫の全体の頭数が半分になるのは、概ね2年半～3年後とされる。効果がすぐに表れるという活動ではなく、数年をかけて緩やかに表れるという気の長い活動である。しかも、異質な「ものやひと」との共生の考え方や意識などは、地域活動の日々の一歩一歩の積み重ねの中で培われるものである。しかし、これは新しい地域活動の姿であり、一人暮らしの高齢者も障害を持った人も地域で最後まで共生しようとする地域の基盤づくりなのである。

#### （4）いいことだと思っても、活動に参加してくれる人がなかなか現れないこと

人は概ね自分の得にならないことはやりたがらないし、関心も持たない。長い目で見ると得になるのだが、それを分かってもらうよう説明するのは難しい。

福岡市が実施した市民20歳以上男女2000人を対象にした「ペットに関する意識調査」結果（H26年6月）の抜粋を表に示す。

表1 ペットに関する市民意識調査結果の概要について(一部抜粋)

調査項目	結果
地域猫活動の認知状況	内容まで知っている 9.4% 聞いたことがある 13.5% 知らなかった 74.8%
地域猫活動の参加意向	参加したい 3.1% 地域で取り組むなら 23.6% できればしたくない 25.6% 参加したくない 44.5%
地域猫活動の賛否	賛成 80.4% 反対 13.2%

〈有効回収率 54.6%〉

地域猫活動の認知率は2割強にとどまっているばかりか、「賛成ではあるが自分は参加したくない、今は参加できない」という意向の表れと解釈できる。有効回収率を併せ考えると、数字上でも住民の2割でも組織できれば上出来といったところである。いざ活動開始になると、これよりぐっと少なくなるのが地域のリアルな現状であろう。この傾向は自治会役員などの他の地域活動にも連動しているはずである。猫を「目の仇」にしている人の割合は地域全体のほぼ2割と言われることから、地域猫の場合はこれにもう一つ、隣近所に気を遣いたくないという要素が加わりさらに少なくなる。

「ボランティアが決まった時間と場所で猫に餌をやり、周辺を清掃している姿、よく見るとそこにはトイレが二つ三つ、猫を目にした人とコミュニケーションの輪ができ、やわらかい空気が…、」というのが理想のイメージであるが、現実はそういうものではない。多くの地域が成熟途上にあり、地域猫活動に反対の意向を示す住民を刺激しないよう気遣い、人目につかない場所と時間で活動している地域も少なくない。このような現場の肌感覚が行政に伝わりづらい部分であり、ここで行政の後押しがあれば功を奏する部分ともいえよう。

以上のようないくつもの壁に直面するのが、この活動の困難さである。この壁を少しでも削るにはどのような手立てが考えられるのだろうか。従来の、迷惑な存在を排除する殺処分や給餌規制強化で抑え込む方法は、一時的効果は出てもかえって問題の本質から目をそらす。これでは問題は潜在化するだけで解消に向かったとは言えない。人の抱える問題が猫の問題にすり替わって顕在化している場合が多いからである。

## 5. 猫問題対策から地域づくりへ

前述のように「猫問題対策」に関しては、原因を排除あるいは規制すれば解消するかといえば、もっと大きな枠組みで捉えないことにはかえって望ましくない方向に向かうとい

う要素が内包されている。対策を取るためにには原因を絞り込むことだが、猫問題に関してはかえって問題点が単純化、矮小化される危険性をはらむ。その点「地域猫」なら日本人の自然観や動物観、宗教観といったメンタリティーにもなじみ、猫による被害低減効果も期待できると思われる。行政による「啓発」も進められており、どちらも大きな枠組みによる解決を図ろうとしている。

しかし「地域猫」の理念は、なかなか広がりを見せてはくれないようである。一つには広報では、「野良猫の糞尿被害や無責任な餌やりで猫が増えた」等の迷惑行為(マイナス面)を起点に、猫問題のみの視点で「地域猫活動」が語られているからではないだろうか。これを受け取る市民の側から考えると①誰もが多少を問わず目にした経験のある糞尿や給餌を被害行為として意識づけされる。②迷惑をかけているわけでも猫を飼っているわけでもないのに、労力も経費も自分たちが負担、にもかかわらず③増えることもないが当面減ることもない。だから④それほど困っていないのなら、自分には関係ないこととしてスルーする。このように、猫トラブルからだけでは面倒なわりに効果は限定的で、利点を感じられないのではなかろうか。

それならばいっそ、別のアプローチでこの問題を提示できないものだろうか。地域猫を野良猫被害解消や殺処分を減らすためだけでなく、筆者が「防犯猫」で取組んだように、実は住みよい環境づくりの問題であること、そういう内容を前面に出した広報を進めることができが肝要である。「排除ではなく共生の論理、考えの違う他者や異質な存在と共生するために必要な考え方や心を育む点→成熟した地域づくり／世代を越えて人を繋ぐ→3世代交流事業／一人暮らしの不安や孤立化→見守りと清掃／窃盗や車上荒らし、性犯罪の多い場所での活動→安心安全な町づくり」など、野良猫問題を切り口に、地域のニーズに即した多様な活動ができるという見通しは持っておきたいものである。

この活動は、地域が住みやすくなるとともに障害のある人や一人暮らしの高齢者、外国人などの受け皿となり、共同共生ができやすくなることに繋がるものと考えられる。地域猫活動は、猫問題を取り口にした人や社会のための活動であることを、広く啓発普及することが求められる。

## 6. おわりに

野良猫問題に関する多くの地域の現実はというと、トラブル解消に立ち上がる人はごく少数な上に、活動者確保も困難なため、いさかいだけがあちこちで勃発するか我慢するかで、イライラだけがつのるという地域環境と思われる。

多くの人が薄々感じているように、野良猫に餌を与える人がいなければ解消するかというと、問題はそう単純ではない。第一、野良猫が引っ越すだけで移動先に同じような困った問題が起きることを考えると、問題を先送りしただけである。第二に、野良猫で解決できなければ、別の迷惑問題が起きて、同じようないさかいの繰り返しで今度は人が引っ越すしか解決法がないという環境の地域になってしまふおそれがあること。猫が不幸な地

域は人も不幸な地域と言わざるをえないゆえんである。

そこで、行政が支援する地域猫活動が、猫の問題というより人の問題として意味を持つ。行政が不妊去勢を助成することで問題の発生源である「繁殖」を抑え込み、猫トイレと給餌と周辺清掃による適正管理というルールの下、共生のしくみがうまれ徐々に対立解消に向かうというのが、住民の手で住みよい環境をつくる地域猫活動なのである。いわゆる「地域飼い」をしようという地域猫は、「相互扶助」という福祉の理念を内包する。この活動は地域の人間関係の融和・優しさのある成熟した地域への入口になり得ると思われる。

一方で、現代社会が抱える様々な影が壁ともなり、活動認知に至るにはまだまだ時間がかかると言わざるを得ない。また、効果がすぐに表れるというわけではなく、未来志向型活動と言える。福岡市全体から多くの活動事例を集め、検証し、知見を蓄積する作業も必要である。ここではこの二年間の活動を通して得られた限定的なものではあるが、まとめてみたい。

第一に、「地域猫活動」を地域全体の人の問題（例えば環境問題）の中で捉え直すこと。第二に、今出来ることを見つけ、一步一步積み上げていくこと。具体的には、地域の環境衛生を目指す取り組みと位置づけ、自分の世話している動物の糞だけでなく、地域内の目につく犬猫の糞やゴミはすべて、それも継続して回収して廻っている。つまり住民同士の協働の仕組みを作った上で、ボランティアは誰にでもできるようなことを誰にもマネできないくらい毎日続けること。これは「防犯猫」からの経験則であるが、意外に住民からの理解をえられる近道となる。その上でTNR（繁殖制限）の成果を出すことであろう。出来ることを地道に積み重ね、糞を拾ったりゴミを拾ったりしながら、何かやわらかいものを地域に生み出す。問題が複雑で重層的な割に、有効な手立ては、かつて日本にあった「相互扶助の精神」と地道な活動という案外素朴なところにあるのかもしれない。

地域猫活動が話題になるにつれ、福祉分野を始め教育、環境、法律、都市計画、心理学など幅広い分野で応用できる内容であることが明確になってきた。様々な学術分野での考え方や行動が利用されているようである。野良猫の苦情処理方法の一手段であった地域猫だが、結果的に猫を通して人と人を繋ぎ、相互扶助という福祉の基盤づくりに貢献していると言える。

## [謝辞]

本稿を執筆するにあたり、福岡市家庭動物啓発センターの藤沢大氏からご助言・ご意見をいただきました。また本活動に際し、多大なるご支援をいただいているマリーナ動物病院・院長中岡典子先生、動物愛護管理センターの大神郁朗所長はじめスタッフの皆様に、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

## 【注】

- 1) 2001年、横浜市磯子区で行政・住民・ボランティアの三者共同事業として制度化された。福岡市は地域猫活動を「周辺住民の理解を得た上で、ボランティアグループなどが野外で生活する飼い主のいない猫に不妊・去勢手術を施し、トイレや餌やりの時間を決めて世話をすることなど、一定のルールに従い、猫を一代限りで飼育することで問題解決を図っていく活動」としている。
- 2) 木下政彦は、猫そのものが町づくりの地域資源になりうる力を持っていること、ただしその際には、地域における人と猫の関係をどのように考慮するのか、地域にどのような正負の影響がもたらされるのかを先行事例から学ぶことの大切さを指摘している。
- 3) TNR—Trap Neuter Return（安全な捕獲・手術・元の場所へ戻す）  
動物愛護や生態系の面からは、批判的な意見も起こっている。
- 4) 不妊手術というワクチン」—フィボナッチの70%ルール  
もともとは狂犬病の予防接種の考え方からの提言である。伝染病の流行を防ぐには、感受性集団のうちの70%が予防接種を受ける必要がある。動物の不妊手術は、実質的にいえば「過剰繁殖」という伝染病を予防する「ワクチン接種的」効果である。この前提にたてば過剰繁殖を効果的に減少させるには、その地域の70%に対して不妊手術を行う必要がある、という論理。

## 【参考文献】

- 加藤謙介(2005)「地域猫活動における『対話』の構築過程」－磯子区の事例より－  
『ボランティア学』vol.6
- 木下政彦ほか(2012)『谷中は猫の楽園か—『地域猫』にみる人と猫の幸せ』  
日本大学文理学部社会学科
- 木附千晶(2009)『迷子のミーちゃん』－地域猫と商店街再生のものがたり－ 扶桑社
- 黒澤泰(2005)『「地域猫」のすすめ』文芸社
- 土田あさみ他(2012)「行政による地域猫活動の支援状況及びその効果について」  
『東京農業大学農学集報』57 (2)
- 福岡市(2011)「福岡市ねこの共生ガイドライン」
- 福岡市(2015)「第2次福岡市動物愛護管理推進実施計画」
- 山根明弘(2014)『ねこの秘密』文芸新書





写真1 地域猫



写真2 地域猫



写真3 地域猫



写真4 捕獲器に入った猫



写真5 捕獲器に入った猫



写真6 捕獲器に入ったイタチ



写真7 地域猫への餌やり



写真8 犬にすり寄る猫



写真9 学生ボランティア



写真10 学生ボランティア



写真11 学生ボランティア



写真12 学生ボランティア



写真13 学生ボランティア



写真14 学生と地域の長老との交流



写真15 地域猫公衆トイレ



写真16 地域猫公衆トイレ